

コロナ禍の危機の時代にこそ、
生命の源に遡る対話と、
魂をよみがえさせる歌を！

言魂

—詩・歌・舞

石牟礼道子・多田富雄
深き魂の交歓

水俣のたどつてきた五十年をまざまざと
思い出します。最初から、国家的欺瞞を
身をもつて見破ったのは、おそらく水俣
病患者でありました。厚生省の組織が
原因や責任の所在を隠すように動くと、
たちまち県の行政も市町村の末端組織、
行政協力員に至るまで、いつせいにこれに
ならつて動き、一部の医師たちでさえこれ
にならつて、病人を侮蔑してばかりませ
んでした。闇に葬られた患者たちがどれ
ほどいたことでしょうか。事件発覚より、
五十年の年月が経ちました。医学的に
救済された人はただの一人もおりません。

石牟礼道子 第十信より

私は曲がりなりにも科学、それも生物学
をやつてきた人間です。水俣に象徴され
る生命環境の汚染は、生物全般の生存を
脅かすものであることに気づかぬわけは
ありません。しかも汚染は地球環境にと
どまらず、内部世界、つまり人間の魂を
犯し続けています。内部世界の汚染、危
機をどう告発するのかも話題にしたい。
本当に救いはあるのでしょうか。今、生命と
魂のことを語れるのは、石牟礼さんくら
いだとさえ思うからです。そんな願いで
この往復書簡を始めることにします。

多田富雄 第一信より

出演者

坪井美香

笠井賢一

なかえみ

桜間金記

譜(録音)

野村幻雪

能管・尺八

設楽瞬山

歌・板三味線

佐藤岳晶

キーボード

11月13日(土)15時～17時
事前講座 ありらん文庫資料室

12月19日(日)
14時30分開演
森本能舞台

「また来ん春」
祈ることとします。
多田富雄

石牟礼道子と多田富雄の往復書簡『言魂』(2008年藤原書店刊)は、多田さんが脳梗塞による半身麻痺に加え言語障・嚥下障害、そのうえ前立腺癌の闘病の渦中に、石牟礼さんもパーキンソン病が悪化している状況で始められた。

この二人の渾身の対話に感銘し、お二人の新作能の演习を手掛けていた私は、2008年の7月に「アトリエ花習」の旗上げの公演として、この対話を軸に、お二人の詩や新作能の実演も挿入して上演した。

多田さんは、自ら立ち上げたINSLA(自然科学と

リベラルアーツを統合する会)主催の講演会「日本の農

と食を考える—農・能・脳から見た—2010年4月11日「東京大学安田講堂での催しで、開会の挨拶をされ、

野村万作師の『三番叟』をご覧になり4月21日に逝去。

翌年3月11日に東北大津波により多くの人々が亡くな

り、福島の原発事故をおこした。3月11日が誕生日の石

牟礼さんは2018年2月10日九十歳で逝去。お二人は

生命環境の汚染を深く危惧しながら亡くなられた。

多田富雄没後11年・石牟礼道子没後3年、二人の対

話時に危惧していた生命環境の汚染はいよいよ深刻とななり、政治は隠蔽と虚偽に満ちて劣化を極め、環境破壊も要因である新型コロナウイルスのパンデミックはまだ先が見えない。お二人の深い危機感からの対話を、沉迷を深める現代にいかに受け継ぐかを考えたい。

〈『言霊』の九州公演にあたつて〉

2019年4月20日多田富雄没後9年追悼公演で朝鮮人徵用工をテーマにした多田富雄作『望恨歌』を上演した。そのおり福岡在住の作家林えいだい氏の『死者への手紙』という1990年のドキュメンタリーが多田さんがこの能を書く導火線となつたことが明らかになり、上演の過程が同じく九州朝日放送でドキュメンタリーになつた。以来林えいだい氏の遺志を継ぐ「ありらん文庫」の森川登美江さんから『言魂』九州公演の強い要請があり、このたび文化庁のAFF助成により実現することになつた。さらに『望恨歌』の九州公演につなげていきたい。

アトリエ花習 笠井賢一

◆プロローグ 石牟礼道子『縁亞紀の蝶』より「空と海」と	
歌と舞 坪井美香	なかえみ
キーボード 佐藤岳晶	笛 設楽瞬山
◆多田富雄詩『歌占』	笠井賢一
尺八 設楽瞬山	キーボード 佐藤岳晶
◆多田富雄能『無明の井』より謡(録音) 野村幻雪	坪井美香
第一信 受苦ということ — 多田富雄	笠井賢一
第二信 なふ、われは生き人か、死に人か — 石牟礼道子	坪井美香
第三信 老人が生き延びる覚悟 — 多田富雄	坪井美香
第四信 いまわの際の祈り — 石牟礼道子	坪井美香
◆多田富雄詩『君は忿怒佛のように』笠井賢一	能管 設楽瞬山
第五信 ユタの日と第三の日 — 多田富雄	坪井美香
第六信 いのちのあかり — 石牟礼道子	坪井美香
◆石牟礼道子詩『浜の甲羅』	坪井美香
◆石牟礼道子能『不知火』より謡・舞 櫻間金記	能管 設楽瞬山
第七信 自分を見つめる力・能の歌と舞の表現 — 多田富雄	坪井美香
第八信 花はいづこ — 石牟礼道子	坪井美香
◆石牟礼道子『六道御前』より淨瑠璃	坪井美香
第九信 また来ん春 — 多田富雄	坪井美香
第十信 ゆたかな沈黙 — 石牟礼道子	坪井美香

多田富雄 1934年茨城県結城市生まれ。東京大学誓教授。世界的な免疫学者として抑制T細胞を発見。野口英世賞、朝日賞など多数受賞。文化功労者。能に造詣が深く、自ら小鼓を打ち、心臓移植を主題とする「無明の井」をはじめ「望恨歌」「石仙人」など現代の課題をテーマとする新作能を手がけた。2001年脳梗塞に倒れて後、詩人・能作者として再生。「原爆忌」「長崎の聖母」「沖縄残月記」「花供養」など新作能を書いた。リハビリ診療報酬改定の撤回を求める運動に取り組む。著書に全詩集『寛容』、「免疫の意味論」「脳の中の能舞台」「残夢整理」等多数。自然科学と人文学の統合を体現した「万能人」であった。パンデミックについてINSLAでも取り上げたことがあり、存命であれば如何なる発言をされるかも考えさせられる。

※往復書簡の多田富雄は笠井賢一(石牟礼道子は坪井美香が語る)。◆印は挿入作品

◆エピローグ 多田富雄詩『新しい赦しの国』

石牟礼道子詩『花を奉る』坪井美香 笠井賢一

尺八 設楽瞬山

記録作家 林えいだい記念ありらん文庫資料室
TEL・FAX 092-406-88609
メール tomie-m@satsuma77.com

森本能舞台★
地下鉄駅 バス停 雙葉学園入口
至六本松

2021年12月19日(日)
14時30分開演(14時開場)
森本能舞台 電話092-711-8888
全自由席 3,000円/前売2,500円
お問合せ・お申込み
お問合せ・お申込み
お申込み 092-406-8609

事前講座 11月13日(土) 15時~17時
演出・出演の笠井賢一が映像と実演を交えて
『言魂』の事前講座をします。
○ありらん文庫資料室
○入場無料(限定25名・公演のチケット購入者優先)
○お申込み 092-406-8609

石牟礼道子 1927年熊本県天草郡生まれ。詩人・作家。「苦界浄土—わが水俣病」は文明の病としての水俣病を鎮魂の文学として完成させた。マグサイサイ賞、紫式部文学賞、朝日賞、芸術選奨文部科学大臣賞受賞。著書に「はにかみの国」石牟礼道子全詩集「石牟礼道子全集」「不知火」を藤原書店より刊行。作家としてのすべてが凝縮された新作能「不知火」は東京・熊本・2004年には水俣で奉納上演された。多田富雄は新作能の類型を破る画期的な作品と評価した。現代の病巣を癒す力と深い祈りと歌に溢れた作品群は日本文学の枠を超えた重要な文学となつていて、「口ナ禍の今日ますます示唆に富んでいる。

多田富雄 1934年茨城県結城市生まれ。東京大学誓教授。世界的な免疫学者として抑制T細胞を発見。野口英世賞、朝日賞など多数受賞。文化功労者。能に造詣が深く、自ら小鼓を打ち、心臓移植を主題とする「無明の井」をはじめ「望恨歌」「石仙人」など現代の課題をテーマとする新作能を手がけた。2001年脳梗塞に倒れて後、詩人・能作者として再生。「原爆忌」「長崎の聖母」「沖縄残月記」「花供養」など新作能を書いた。リハビリ診療報酬改定の撤回を求める運動に取り組む。著書に全詩集『寛容』、「免疫の意味論」「脳の中の能舞台」「残夢整理」等多数。自然科学と人文学の統合を体現した「万能人」であった。パンデミックについてINSLAでも取り上げたことがあり、存命であれば如何なる発言をされるかも考えさせられる。